

令和4年5月 9日

南の風 445

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

今回は、選手がどのようなモチベーションを持っているかのタイプを分析して見ます。

大きく分けて3つに分類します。「自然性（じねんせい）」、「可燃性」、「不燃性」です。

「自然性」とは、自分自身の中にモチベーションを保つエネルギーを持っていて、さらにそれを燃やすための火種を持っている選手です。自分で自分のエネルギーを燃やせるのが「自然性」です。このタイプの選手は他者ができるかは関係ありません。コーチが何もしなくても自分で課題を設定して、自らそれをクリアしていくという意欲に溢れています。

「可燃性」も燃えるエネルギーは持っています。しかし自ら燃やす火種がないため、他者から火をつけてもらう必要があります。つまり自然性の選手と一緒にになると力を発揮できます。しかしチーム内に自然性の選手がいないと、持っている力を発揮し切ることができないのです。

ここまで2タイプは程度の差はあっても、スポーツ選手として活躍できる下地はあります。問題は「不燃性」のタイプです。元々燃やすためのエネルギーがなかったり、燃料が湿っていたりして燃えないのです。自然性タイプがたきつけようと、自然性と可燃性が相乗効果を発揮して大きな炎となっていても一向に燃えません。スポーツをしている選手にはこういうタイプは少ないと思いたいのですが、意外と多いのが実情です。

チームには自然性が多いとチームづくりは容易でうまくいきやすいと言えます。しかし、元々絶対数が少ないため、1チームに何人も自然性がいるということは稀です。

一番多いタイプの可燃性をいかに燃やすことができるかが大切になります。そこでコーチの出番です。コーチ自身が自然性なら可燃性の選手たちを燃やすことができるでしょう。コーチが自然性の組織はうまくいきやすいのです。

問題は不燃性です。不燃性がいると可燃性も湿ります。選手を選べるならチームに入れないというのがベストだと思いますが、そうはいかない場合が多いでしょう。不燃性の選手でもコーチの力で湿ったものを乾かすくらいはできるかもしれません。ここでもコーチが自然性であることで大きな力を発揮するでしょう。

不燃性の選手は、自分が意欲を持っていないだけでなく、周囲の選手のやる気まで奪ってしまうことがあります。学校教育の現場では教育の一環としてスポーツをしているので、どんな児童、生徒であっても何とかしてやる気を引き出そう、教育しようとします。それは教育的に大きな意義があり、重要な側面です。

では、学校現場ではないスポーツチームの場合も同じように考えるべきなのでしょうか。多くの選手たちが「最高の自分になりたい」、あるいは「チームを強くしたい」と前向きに考えているときに、1人の「意欲を削ぐ人」に台無しにされることがあるとしたら、それは指導者として受け入れがたいことです。

スポーツをするということは、誰もが持つべき普遍の権利ではありません。 次号にします。